

## 中井厚沢と土生玄碩

宗 田 一

中井厚沢（一七七五—一八三二）と土生玄碩（一七六二—一八四八）は、ともに広島（市中と在郷）出身であるが、両者の関連については、今まで言及されたものを見ない。

玄碩口述の『師談録』には、大坂時代（一七九〇年頃）に眼科医の三井元儒、高充国の二子と親交があり、玄碩が馬医の鍼刺法にヒントを得て発明した刺絡法を、蘭方膿眼剔出術と暗合する、と教えられた。のち大槻玄沢訳『刺絡篇』（稿）を読み、蘭人刺絡法が馬医の術と相符合することを知り、益々その術を精究するようになった。後年、江戸に出て杉田玄白の家に寄寓、しばしばこの刺絡法を実施するのを見た玄白は、これを門弟の大槻玄沢に告げ、玄沢がそれを実見して大いに驚いた、とあるけれども、洋方眼科に関連して中井厚沢の名は、どこにも見えない。

ところが中井厚沢は、洋方眼科を玄碩に最初に教えた

いつている。

「…初メ玄碩、余ニ就テ大西眼科之術ヲ学ブ、余、示スニ大西眼科全書ヲ以テシ、遂ニ其薬法ヲ授ク、輒（スナワ）チ其ヲ説キ、大イニ旧観ヲ改メ、以テ大業ス…」（中井厚沢口授『泰西眼科全書藥物考』）

こうして玄碩は、洋方眼科をもって一家を成そうと志し、江戸に出て開業、その業大に行われ、ついに幕府奥医師になった、と厚沢はいつている。

\*

右の厚沢がいう『大西眼科全書』は、ブレンキ眼科書の訳、宇田川玄真訳『泰西眼科全書』（未刊）として知られ、この翻訳の経緯については、緒方富雄<sup>(1)</sup>、杉本つとむ氏<sup>(2)</sup>らの発表があり、拙稿<sup>(3)</sup>の追加もある。

この訳書には、大槻玄沢の仲介があり、陰の立役者だった。厚沢は玄沢門の關係で、その写本を入手する機会があったのだろう。のち杉田立卿が重訂、門人の衣関順庵が増補し、さらにそれが改訳され、杉田立卿訳『和蘭』眼科新書』（文化十二年、一八一五）として刊行され、その藥物を扱った『同附録』（松田芹齋輯録）も刊行された。

ところで、中井厚沢口授『泰西眼科全書藥物考』には、新宮涼庭が筆記者の一人として関与している。

涼庭は、長崎遊学の途中、広島に文化七年（一八一〇）一〇月七日から翌八年八月一日まで滞在しているから、この書はこの間の筆記とみられる。玄碩の奥医師登用も文化七年で、年代的に一致する。とすれば、右の立卿訳『眼科新書』刊行後のことになるが、これとは無関係な内容の口授本となっている。

\*

右の厚沢口授本に、「コウラルド鉛水方」が二方出てくる。ドイツ人医ゴウラルド創製の点眼薬であるこの薬方の製法をめぐって、緒方氏が「玄沢の激憤」といわしめた、玄沢と大森寿安をめぐる、いわくつきの薬である。

この原書に薬方と製法の詳細が示されていないところから、寿安が玄沢に調査を依頼、玄沢は蘭館医レツケ H. Retzke に質問（享和二年、一八〇二）、自身でも蘭書を調べ製法を知り寿安に教えた。

ところが、玄碩が厚沢に伝えた薬方は、玄沢が Retzke から教えられたものに一致するの、玄碩は自身で蘭人か

ら伝授してもらったようなことをいっている。

玄碩の江戸行は文化五年（一八〇八）とされるから、右の玄沢が Retzke から教えられた年より六年後のことになり、厚沢口述本の年代から見て、享和二年以後の江戸参府の年代、文化三年（一八〇六）と同七年（一八一〇）のうち後者に限定される（ともに参府の蘭館医は J. F. Feijike）。

ところが、厚沢口授のもう一方は、厚沢が以前西遊時 Feijike から教えられた薬方で、前者が、予め鉛丹（四三酸化鉛）に酢を反応させて作っていた鉛糖（酢酸鉛）に水を加えたものであるのに対し、後者は蜜陀僧（一酸化鉛）に酢を反応させて作った酢酸鉛液の上澄液に水を加える方法で、若干製法が異なっている。

思うに、玄碩のそれは、玄沢が先に得ていたそれだったのだろう。こんなところに玄碩の性格（郷里では「法螺（吹き）玄碩」と呼ばれていたという）を垣間見る思いがある。恐らく、厚沢は師玄沢からこの薬方や経緯は知らされていなかったのだろう。しかし厚沢は玄碩から教えられた薬方を「玄碩伝」と明記し、のち試用して前者にはるかに優ると付記しているのも、両者の性格の相違をうかがわせる。

(1) 緒方富雄…大槻玄沢の激憤、蘭研報二二三二号、一九七〇年三月。

(2) 杉本つとむ…本邦初訳『眼科新書』翻訳の事情、『日本翻訳語史の研究』、一九八三。

(3) 宗田一…眼科用ロート・ソイケル（鉛糖、酢酸鉛）剤、医薬ジャーナル二二卷三号、五八四〜八ページ、一九八五。

(4) 玄沢は厚沢の『ビリリ考』に贅意の付文を付して厚沢に送ったが、のちその意見を撤回し、追加付文を書いている。しかし、それを厚沢に送らなかつた事例があるのも参考になるうか（宗田…ビリリ考後日譚、医薬ジャーナル、二〇卷一一号、一八三〜一八六ページ、一九八四…同…蛭薬ビリリ考（中井厚沢と大槻玄沢）、医譚、復刊五四号、二一〜二三ページ、一九八五。

（資料）中井厚沢口授『泰西眼科全書藥物考』「此方土生玄碩伝、初玄碩就余而学、大西眼科之術、余示以大西眼科全書、遂其薬法、玄碩輒説其大改旧観以為大業焉、乃欲以是成一家、以救世之不能与父童觀者也。自謂其地不高則呼而不遠也、遂之江戸而開業焉術大行焉、果除為御輿側医官、於是移其家於江戸也、一来謁吾芸州侯、私訪余謝前年之事、治術之談不一而足也、掩留之際投問即与余往来、於是乎以此コウラルト鉛水方質焉云、不佞在江戸之日、

遇会蘭人之来、以詔介訪此方有与先生所伝者小異同也、敢質之請試用之、余其後試用其効遙優、以是附記。」

（京都市）